明治宮殿の造営過程に見る木造和風の表向き建物の系譜とその意匠的特徴

THE CHARACTERISTICS OF THE JAPANESE-STYLE DESIGN
CREATED IN THE *MEIJI PALACE'S* BUILDING PROJECT

山崎 鯛 介*

Taisuke YAMAZAKI

This paper shows that the history of the Meiji Palace's building project should be interpreted as a history of developping a traditional Japanese-style design into a modern Japanese-style design adaptable to the western style ceremonial space that had the higher-raised ceiling and the western-ornamented walling. To show the traditional formality of the Palace, the Kyoto Palace's designs (the coved and coffered ceiling and the hinged shutters) were often quoted in the project. Finally these traditional designs were only applied to the private audience room, and in the other grandiose ceremonial space, these traditional designs were adapted taking care to its western interior.

Keywords : the Meiji Palace, Modern Japanese-style, the Kyoto Palace, tradition

明治宮殿、近代和風、京都御所、伝統

1. 緒言

明治21年に木造和風で建設された明治宮殿(正式には「皇居宮殿」)の意匠的特徴としては、表宮殿に見られる立式対応・和洋折衷の室内意匠がよく知られている。この床を立式対応としながら、壁面や天井意匠に柱・長押や格天井などの和風意匠を用いた意匠形式については、その後、日本銀行本店(明治29年)の貴賓室や国会議事堂(昭和11年)の便殿などにも用いられたことから、少なくとも後世においては建物の用途や構造形式に関係なく「格の高い接客空間」を表現しうる室内意匠の形式の一つとして認識されていたと考えられる。

明治宮殿の和風意匠については、こうした後世の建築に与えた影響が指摘される一方で、それ自体の表現意図、すなわち建設時において設計者が何を表現するためにこうした和風意匠を用いたかという点や、そうした意匠形式がどのような経緯を経て創出されたかという点については、これまであまり論じられていない。表宮殿の和風意匠は、近代的な立式の儀礼空間に「伝統」の表現を試みたものと考えられるが、そこで何を「伝統」として示すかは「近代の宮殿」としてのあり方を決定する際の重要な基準の一つであり、またその表現手法については、建設時期の早さゆえに前例も少なく、設計過程においてはさまざまな形で検討が繰り返されたと考えられる。そこで本研究では、明治宮殿に用いられた和風意匠に注目し、竣功建物とともに造営

過程において示された和風意匠も含めて考察することで、そうした和風意匠がどのような意図を示したものであるか、またその手法がどのような経緯を経て形成されたものであるかについて明らかにした。

明治宮殿の造営過程については、小野木重勝博士の2つの論文「明治宮殿」(博物館明治村編『明治宮殿の杉戸絵』平成3年)と『明治洋風宮廷建築』(相模書房、昭和58年)に詳しい¹⁾が、いずれも造営過程は洋風組積造の計画案を中心に描かれており、木造和風の計画案については、赤坂の洋風謁見所・会食堂移築計画の中止を受けて計画された明治14年の木造和風宮殿計画と、山里正殿計画の中止を受けて明治16年以降に計画された実施過程の経緯が紹介されるに留まり、計画案の内容にはあまり触れられていない。そこで本研究の方法として、まず造営過程で断続的に計画された木造和風の計画案について、できるだけ史料を広範に蒐集してその具体的特徴を明らかにし、その上でそれらの関係について考察することで、明治宮殿の造営過程を「木造和風宮殿の形成過程」として捉え直すこととした。また、和風意匠に示された「伝統」の意味を考察するため、その意匠的特徴を京都御所の建物と比較した。京都御所は「木造和風宮殿」として明治宮殿に先立つほとんど唯一の事例であるとともに、明治天皇が幼少時を過ごしたことから、設計に際してモデルとして参考にされた可能性が高く、また「近世の御所」と「近代の宮殿」の和風意匠の用い方を

* 東京工業大学大学院理工学研究科 助手・工修

Research Assoc., Dept. of Architecture, Graduate School of Science and Engineering, Tokyo Institute of Technology, M. Eng.

比較することで、伝統的な日本建築の和風意匠と近代的な空間特性に配慮した和風意匠との区別が明確になると考えられるからである。

既往研究では、明治宮殿の和風意匠について、造営計画全体を通してその形成過程や表現意匠を考察したものは見られない。小野木重勝『近代和風宮廷建築における和洋折衷技法に関する研究』（昭和62年度科学研究費補助金〔一般研究C〕研究成果報告書）では、明治14年の計画案が表宮殿・奥宮殿をとともに木造和風で建設することに決定した最初の計画案と位置づけられ、その1月案と京都御所との平面形式の類似性を指摘している（p.7）が、その具体的な設計内容や意匠的特徴については触れていない。稲葉信子『木子清敬と明治20年代の日本建築学に関する研究』（東京工業大学博士論文、平成元年）では、主任技師の一人である木子清敬の経歴から、「設計にあたっては、京都御所や大宮御所などが参考にされたものと考えられる」（p.48）と指摘している。赤坂仮皇居会食所との比較や設計技術者を介した考察は、明治宮殿の和風意匠を理解するにあたって重要な視点と考えられるが、同書ではそれらについて具体的に検証するまでには至っておらず、まだ作業の余地を残していると考えられる。設計技術者については、小野木重勝『明治洋風宮廷建築』第七章第三節「技術者構成と技術伝承」において、皇居造営に関与した技術者の経歴が明らかにされ、藤岡洋保・稲葉信子・斎藤雅子「東京都立中央図書館木子文庫所収の明治宮殿設計図書に関する研究」（『日本建築学会計画系論文報告集』第431号、1992）では、実際の設計過程における木子清敬の関わり方が考察されたが、木子清敬も含めた個々の設計技術者が近代的な和風意匠の創出過程でどのような役割を果たしたかについては、まだ不明点が多いと考えられる。本稿では、これら先行研究を踏まえ、設計者と設計内容の具体的な関係について考察を加えた。

なお、拙稿「明治宮殿の建設経緯に見る表宮殿の設計経緯」（『日本建築学会計画系論文集』第572号、pp.159-166、2003年10月）では、明治宮殿の建設過程で行われた表宮殿の設計変更について、その経緯と内容を明らかにし、また拙稿「明治宮殿の設計内容に見る儀礼空間の意匠的特徴」（『日本建築学会計画系論文集』第578号、pp.169-176、2004年4月）では、表宮殿の意匠的特徴を平面計画や用途との関係から明らかにした。本稿の第四章では、これらの研究成果に基づき、実施過程における表宮殿の和風意匠に見られる特徴を考察した。

史料として、明治17年以降の実施過程については、宮内庁所蔵『皇居造営録』（皇居御造営事務局、明治9年～23年）や『皇居御造営誌』（内匠寮、明治25年）、および東京都立中央図書館木子文庫所蔵の明治宮殿関係史料を主に用いて検討した。それ以前の計画案については、木子文庫所蔵の図面史料や宮中関係者の日記、『明治天皇紀』などをできる限り蒐集・精読して知見を得るよう努めた。

2. 明治14年に計画された「紫宸殿」風の謁見所

小野木博士は、明治14年に計画された木造和風の計画案について、主に構造上の理由から「木造」で計画された点に注目しているが、なぜ「和風」で建設されたかという意匠上の問題については触れていない。本章では、この時期の計画案について、その内容と経緯をできるだけ明らかにするとともに時代背景も含めて考察することで、なぜこの時期に宮殿が「和風」で計画されたかについて論じた。

この時期の木造和風の計画案としては、宮内庁所蔵『皇居御造営編纂下調図』（以下『下調図』）に、京都御所の調査（明治13年11月17

日）直後に作成された明治14年1月案（第24号、以下「初期案」）、敷地境界などを考慮して初期案に修正を加えた²⁾同年4月11日作成の「天覧図」（第26号）、天覧後に明治天皇の意向を受けて修正を加えた「修正案」（第27号）の平面図が収録されている。このうち「天覧図」について見ると、謁見所、饗宴所、内謁見所、控所などの主要建物は敷地南側に配され、北側には宮内省関係の諸室を配し、中庭に共用のアプローチ空間を確保する配置構成が取られている（図1）。主要建物の平面については、謁見所と内謁見所には京都御所の「紫宸殿」や「小御所」とほぼ同じ規模・平面形式が用いられ、会食所と控所はいずれも大空間の建物として描かれている³⁾。これらの建物は、天覧後の修正によって内謁見所が御学問所との2階建てに変更され、2室あった控所が1室にまとめられたが、それ以外は天覧を経てほぼそのまま承認されたと『皇居御造営誌』には記されている。

これらの建物は、まず「朝儀」のための場として計画されたと考えられる。『皇居造営録』所収「會食所及溜ノ間人員調方ノ儀宮内書記官往復」⁴⁾には、「会食堂」と「控所」を使用する者の身分と人数が記されているが、ここで「会食堂」は、親王、大臣参議、各国公使、勅任官、麝香問詰の合計156人が使用すると算出され、また「控所」は、上記の身分の者は夫人同伴で、その他に「武官奏任六等以上」（147人）、「文官奏任并警視補」（415人）など、合計2356人が使用すると算出されている。明治時代の朝儀は、明治14年に大幅に変更され、新年拝賀には欧米風の夫人同伴形式が導入され、三大節賜宴（新年宴会、紀元節賜宴、天長節賜宴）には外国公使が招待されるようになった⁵⁾が、上記史料に記された招待客の身分は、こうした当時の朝儀の制度とほぼ一致しており、上記史料の「会食堂」は三大節賜宴を、「控所」は新年拝賀をそれぞれ想定して、人数を算出したものであったと考えられる。

一方、これらの計画案では「国賓接待」⁶⁾を行うことは想定されていなかったと考えられ、ここではポアンビル設計の洋風謁見所・会食堂に見られた「転球所」や「喫茶室」など、外国賓客の謁見・饗応のための諸室⁷⁾が設けられていない。これは計画の前提として、外国賓客の謁見・饗応施設を別途赤坂仮皇居内に石造で建設することが想定されたためと考えられ、このことは、洋風謁見所の移築中止が決定された際の、「而シテ前條石造謁見所ノ議ハ右旧西丸皇居竣功赤坂假皇居内太政官其他諸建物取払ノ後右御構内ニ於テ恰好ノ場所御撰定御

図1. 明治14年4月の木造和風宮殿計画「天覧図」（宮内庁所蔵『皇居御造営編纂下調図』所収・部分、方位は上方が西（山里）を示す）

建築相成候テ可然ト存候」⁸⁾との『皇居御造営誌』の記述に窺える。このように、この時期の木造和風の計画案は、宮殿の用途を「宮中儀式」に特化して計画されたものであったと考えられる。

これら計画案に示された個々の建物の意匠についてはほとんど不明であるが、「紫宸殿」風の謁見所については、工部少輔・吉井友実の日記『三峰日記』⁹⁾に、「紫宸殿御模様ヲ其儘御用相成度申出則チ評議ス」(明治13年11月17日条)とあり、また後に計画案が批判された際には、「且ツ紫宸殿ノ如キハ四方蔽障ナキヲ以テ寒時ノ禮典行ハル可カラス到底時勢不相當ナル可キカノコト」¹⁰⁾と指摘されたことから見て、平面形式だけでなく建物の構造や建具についても京都御所の紫宸殿とかなり似たものが計画されていたと考えられる。なぜこうした「紫宸殿」風の謁見所が計画されたかは不明であるが、その理由の一つとして、「即位の礼」などの皇位継承儀礼を謁見所において行うことが想定された可能性が考えられる。皇位継承制度については、岩倉具視を中心に明治11年頃から検討され始めたことが『岩倉公実記』などから知られるが¹¹⁾、それと並行して、「即位の礼」や立后・立太子の礼など皇位継承に関する儀礼の形式についても、京都御所を保存し、そこで古式に則って行うことが明治天皇や宮中関係者によって提案されたことが知られている¹²⁾。この件は、最終的に「即位、大嘗會、立后ノ三禮ハ國家至重ノ大典ナレハ平安京ノ宮闕ニ於テ古式ノ如ク執行セラル、モノト定ムヘシ」¹³⁾として、京都御所で挙行することが明治16年4月26日に決定するが、京都御所での挙行が不可能であった場合には、皇居において儀式を行うことも当然想定されたと考えられることから、古式の「即位の礼」を想定して「紫宸殿」風の謁見所が計画されたという見方も、可能性としてはあり得る。

「修正案」では、謁見所に「紫宸殿」と記された他、内謁見所は2階建てに変更されたにもかかわらず「小御所」と記されるなど、建物の呼称に御所風の名称が用いられた。こうした呼称は、吉井友実の考案であることが『三峰日記』(明治14年4月23日条)から知られ、ここでは京都御所には存在しない会食所や控所についても、「豊樂殿」(会食所)や「齋集殿」(控所)と、復古的な呼称を用いることが提案されている。こうした復古的なイメージの提案は、当時の宮中関係者の関心を反映したものであったと考えられ、例えば柳原前光は、「魯・奥・李皆君権熾盛ノ國ナリ、朝儀中頗ル旧格ヲ墨守シ、現世不似合ノ事ヲ行フ、蓋シ帝王國ハ皆慣習ヨリ成立ツモノ故、從テ儀式モ旧ヲ守ルニ似タリ(中略)故ニ我朝廷モ、祭祀ノ如キハ独有ノ禮ナレバ、頗ル旧觀ヲ保存スル盛禮ヲ存シ置候コト可然存候」¹⁴⁾と、西洋諸国も各国固有の慣習に則って「朝儀」を行っており、日本も宮中儀礼を古式で行うべきであると主張している。この時期の皇居造営の主任は、工部少輔の吉井友実であったと考えられる¹⁵⁾が、吉井は同時に天皇側近の侍補でもあったことから、計画案には天皇や宮中関係者のこうした意向が入る余地も多分にあったと考えられる。

宮中関係者に見られるこうした復古的な宮中儀式への関心の高まりの背景には、この頃に宮中儀礼が急速に洋風化されたことへの反感もあったと考えられる。宮中儀式の洋風化は、条約改正予議会¹⁶⁾の開催を控えた明治13年頃から、外務卿・井上馨によって「観菊会」・「観桜会」などイギリス風の園遊会の開催や、新年拝賀への夫人参加、三大節賜宴への外国公使の招待といった形で導入された¹⁷⁾が、柳原前光や佐佐木高行などの宮中関係者の日記・書簡¹⁸⁾からは、こうした一連の洋風化に対して宮中関係者の多くが反感を持っていた様子を知

ることができる。井上馨はまた、儀礼形式の洋風化だけでなく、皇居造営計画においては洋風組積造の建設も推進したと考えられ、それは『三峰日記』に「工部卿ト共ニ御前ニ伺候御造営ニ付テハ御入費ニ無御構堅牢ヲ主ト被遊度旨井上ヨリ言上ニ及ヒ御承諾被遊候事」(明治12年7月22日条)と、工部卿の在任期間(明治11年7月～明治12年9月)にボアンビル設計の赤坂謁見所・会食堂建物の移築を推進したことを示す記述が見られることや、山里正殿計画においては「皇居造営局被設置候事ニ相成、総裁は條公、副総裁は野生被仰付候段、全く尊台之御配慮よりして斯く相運び候段、不堪銘感之至、早速右御吹聴ニ罷出候義ニ御座候。扱又此上ニモ猶尊台之インフリュエンスを仰度事は、局中之諸役員中ニ就キ、工部より出居候平岡氏並ニ會計長谷川氏は、是非共御造営局専務ニ被仰付度之一事ニ而候」¹⁹⁾と、洋風正殿計画を主導した榎本武揚を皇居造営事務局副総裁に推薦したことを示す書簡が残されていることなどに窺える。

以上のことから、この時期に計画された木造和風宮殿は、宮殿の用途を「宮中儀式」に特化し、そこで復古的な宮中儀式を行うことを前提に計画されたものであったと考えられる。これは、その前後に計画された洋風謁見所の計画が、あくまで皇居で洋風の「国賓接待」を行うことを中心に計画されたものであったのに対し、「国賓接待」は赤坂の離宮で行えば良いとする宮中関係者の考え方を主に反映したものであったといえる。このように、造営計画の初期において計画が二転三転した理由には、従来知られてきた構造形式や様式の問題とともに、「近代の宮殿」の用途に見られる二面性、すなわち「伝統的な宮中儀式」と「洋風の国賓接待」のいずれを優先するかを巡って、「宮中」と新政府が対立していたことの影響もあったと考えられる。

3. 吹上宮殿に計画された「小御所」風の内謁見所

明治14年4月に天覧に供された木造和風宮殿の計画は5月に入って急遽中止され、新たに洋風組積造の山里正殿と木造和風の吹上宮殿からなる計画が立案された。山里正殿については、小野木博士の研究によってその詳細が既に明らかにされているが、「奥向宮殿」と位置づけられた吹上宮殿の内容については、これまでほとんど知られていない。しかし、木子文庫には吹上に計画された内謁見所や御学問所、御車寄などの図面が数多く残されており、吹上宮殿にもそうした「表向き」の施設が木造和風で計画されていたことが知られる。そこで本章では、これら吹上宮殿に計画された「表向き」の木造和風建物について、その設計過程と設計内容をできるだけ明らかにするとともに、その意匠をほぼ同時期に建設された赤坂飯皇居会食所(明治14年10月竣工)と比較することで、和風意匠の用い方に「宮殿」としての「格式」を表現しようとする意図が見られることを論じた。

吹上宮殿の計画案については、『下調図』に明治14年7月11日から明治15年12月27日にかけて作成された13種類の平面図²⁰⁾が収録された他、宮内庁書陵部には「明治十五年十二月廿七日調整」と記された吹上宮殿の全体平面図が所蔵されており、平面計画の変遷について知ることができる。明治16年1月13日には、皇居御造営事務局が工事監理を主とした体制へと改組された²¹⁾と見られることから、明治15年12月27日案は、吹上宮殿計画における「最終案」と見て良いと考えられるが、この「最終案」を見ると、山里正殿との連絡橋に近い最も「表向き」と考えられる敷地東側に、左右相称形の御車寄と大面積の内謁見所が設けられたことがわかる(図2)。内謁見所は、

外国公使や臣下との内謁見を行う場所であることから、宮殿には不可欠の施設と考えられるが、山里正殿にはそれに相当する部屋が計画されておらず、ここでは山里正殿の機能を補う形でこれら表向きの施設が吹上宮殿に計画されたと考えられる。

また設計過程について見ると、これらの建物は吹上宮殿の計画当初には計画されておらず、明治15年6月以降に計画されるようになったことが『下調図』からわかる。それ以前には、聖上常御殿に隣接して計画された「御三間」²¹⁾が内謁見用の建物に充てられたと考えられ、御車寄についても、当初は御学問所に付属する簡便な形のものとして、また明治15年4・6月案では一列型の独立建物として聖上常御殿と御学問所の中間の位置に計画されたことがわかる。いずれもその配置を見る限り、公的な内謁見には不都合と考えられることから、主に天皇の私的な用途を想定して計画されたと考えられる。御車寄は、最終的に記念性の強い左右相称形の平面で計画されたが、これは明治14年11月24日に制定された「御車寄昇降規定」において、「御車寄」を天皇以下の皇族や外国公使が使用するものと定め、日常的に臣下が使用する「通常車寄」と区別するようになった²²⁾ことを受けて、「御車寄」の立面に「格式」を表現したものであったと見ることができる。このように、吹上宮殿に計画された内謁見所と御車寄には、実際に使用することを想定して計画されたと考えられる節が見られるが、そうした傾向は、これらの建物が山里正殿計画が確定（明治15年3月17日）し、その事業組織である「皇居造営事務局」が設置（明治15年5月27日）された後に計画されたことにも窺える。

次に、内謁見所の設計内容について詳しく見ると、内謁見所が大幅で計画されるようになったのは、明治15年10月以降であったことが『下調図』からわかる。木子文庫には、この大幅の内謁見所に関する平面図・立面図・矩計図・屋根伏図・小屋組図が残されており²⁴⁾、これらを用いて内謁見所の規模と意匠について表1にまとめ、それをほぼ同時期に建設された赤坂皇居会食所と比較した²⁵⁾。両者を比較すると、平面については梁間と桁行きの比率が異なるものの、床面積は56坪～58坪とほぼ等しく、内法高や天井高についてもほぼ同じであることから、内部空間がほぼ同じ規模で計画されたことがわかる。一方、意匠については違いが見られ、吹上宮殿の内謁見所には赤坂皇居会食所に見られない「葎戸」や「折上小組格天井」などが用いられ、また北西部に矩折れて設けられた「御椽座敷」の天井には「化粧屋根裏」が用いられた²⁶⁾。この「葎戸」や「折上小組格天井」、「化粧屋根裏」は、京都御所の紫宸殿や小御所などに見られ、近世武家の表向き御殿にはあまり見られないことから、「御所風」の意匠と見て良いと思われる。吹上宮殿の内謁見所と赤坂皇居会食所は、その時期

と規模がほぼ同じであることに加え、いずれも設計に木子清敬が深く関与したと考えられる²⁷⁾ことから、こうした意匠の用い方の違いは、「御所風」の意匠を正式な「宮殿」に適用することで、「仮皇居」よりも格の高い意匠表現を試みたものであったと考えられる。そして、こうした御所風の意匠を適用した結果、内謁見所の外観意匠は京都御所の「小御所」とよく似たものとなったことがわかる（図3）。

このように、吹上宮殿の内謁見所は、大幅で「小御所」風の意匠を持つ建物として計画された。この理由としては、内謁見以外に「朝儀」を行うことが想定されたためと考えられ、それは赤坂皇居においては三大節賜宴が新築の会食所で行われていたのに対し、吹上宮殿にはそれに相当する規模の建物が他に見あたらないこと、また賜宴に先立って行われる拝謁については、明治14年以降、「但し、今年より各國公使を招請したまふ、又祝宴を小御所代に開きたまふに先立ち、御座所に於て、親王侍立の下に大臣・参議・外務卿・各國公使に謁を賜ひ、親王及び大臣以下を従へて小御所代に出御あらせらる」²⁸⁾と、身分の高い者は御座所で天皇に拝謁し、その後一緒に会食所に出御する形式に改められており、これを山里正殿で行うには距離が遠く、聖上常御殿や御学問所と近接する内謁見所で行う方が適切と考えられることなどから推察される。三大節賜宴は立式・洋装で行われたが、その内容は一貫して、勅語あり、和食昼餐、皇后・婦人不参加といった伝統的な形式であったことが『明治天皇紀』などから知られ、内謁見所に用いられた「御所風」の意匠はまた、こうした「朝儀」の伝統的な内容にも配慮して計画されたと考えられる。

以上のように、吹上宮殿には「小御所」風の内謁見所が、臣下や外国公使との内謁見だけでなく、新年拝賀や三大節賜宴などの伝統的な「朝儀」も行う場として計画されたと考えられる。これは「国賓接待」に特化した山里正殿に不足する施設を実施を前提に吹上宮殿に計画したものと見ることができ、そうした現実的な点において、いずれか一

表1. 吹上宮殿計画「内謁見所」と赤坂皇居会食所との比較

		吹上宮殿・内謁見所	赤坂皇居・会食所
空間の規模	平面形状（梁間×桁行）	35.75尺×58.5尺 =58坪	28.35尺×72尺 =56.7坪
	天井高（廻縁下端）	13.94尺	14.26尺
	内法高（無目下端）	7尺	6.9尺
構造形式	柱太さ	6寸角	6.6寸角
	小屋組	トラス	和小屋
室内意匠	床仕上	不明（板張下地）	絨毯敷き（拭板下地）
	建具	襖・明障子	襖・ガラス障子
	天井形式	折上小組格天井*	格天井板造
外観意匠	外周建具	葎戸	建葎戸
	屋根	入母屋・銅板葺き	入母屋・桧瓦葺き
	高欄の有無	有	無

*12月案は「折上小組格天井」、10月案は「化粧屋根裏」と記されている。

図2. 吹上宮殿計画「最終案」平面図（明治15年12月27日、宮内庁所蔵・部分）

図3. 吹上宮殿計画「内謁見所」東立面図（明治15年10月～12月頃、東京都立中央図書館・木子文庫所収）

方に特化することを主張して計画変更を繰り返した明治13年～14年の計画案よりも、造営計画がより具体的な段階に進展したことを示していると考えられる。

4. 建設過程の設計変更における近代的な和風意匠の考案

山里正殿・吹上宮殿計画はその後、明治16年4月23日に中止が決定し、同年7月に「木製假皇居」として全て木造和風で建設することに決定した。中止決定に先立つ4月14日には、宮内卿・徳大寺実則によって「右謁見所ノ儀ハ元来謁見所ノミノ構造ニシテ皇居正殿ニ可充儀ニ無之就テハ廉々不都合ノ場所不少到底完全ノ物ニ無之候」との上申文²⁹⁾が出されたが、これは第二章・第三章において見てきた「国賓接待」と「宮中儀式」との関係を踏まえると、山里正殿が伝統的な「朝儀」を行うのに不向きであることを批判したものと読むことができる。明治17年4月以降の設計過程については、拙稿「明治宮殿の建設経緯に見る表宮殿の設計経緯」(先掲)において、洋風の「宮中夜会」を念頭に、表宮殿の主要建物に対して天井高の拡大や室内意匠の洋風化といった設計変更が加えられたことを明らかにしたが、こうした壮麗な内部空間においては、伝統的な日本建築に用いられた和風意匠をそのまま適用することは難しく、大空間・和洋折衷といった近代的な空間特性に配慮しつつ、新しい和風意匠を考案することが求められたと考えられる。そこで本章では、建設過程で加えられた「天井高の拡大」と「室内意匠の洋風化」の二つの設計変更に着目し、そこで主要建物の和風意匠がどのようにデザインされたかを具体的に明らかにすることで、明治宮殿に用いられた和風意匠に見られるそうした「近代和風」としての特色について明らかにした。

まず、吹上宮殿の内謁見所に見られた「小御所」風の天井意匠は、竣工建物では内謁見所に適用された。ここでは室内が「二重折上小組格天井」、入側が「繫虹梁・化粧屋根裏天井」とされ、吹上宮殿の内謁見所よりも実際の小御所の上段之間(二重折上小組格天井)と庇之間(繫虹梁・化粧屋根裏天井)に近い形式が採用されている。内謁見所の天井意匠は、当初からこうした「御所風」の意匠で計画されていたわけではなく、明治17年5月頃の計画案³⁰⁾には、室内が「格天井塗格縁金張付」、入側が「猿頬天井」として計画されたものも見られる。竣工建物と同じ「小御所」風の天井意匠は、明治17年8月案³¹⁾以降に見られるようになる(図4)³²⁾ことから、この意匠は儀礼空間の規模拡大と並行して適用されたものであったことがわかる。

設計過程では、内謁見所の他に謁見所にも「二重折上小組格天井」が計画されたことが、木工事着手直前の様子を示した平面図「第貳区各所柱敷座色分之図」³³⁾から知られる。両者は空間の規模が大きく異なるものの「謁見空間」という点で共通していることから、「二重折上小組格天井」は、謁見空間において天皇の「格式」を表現するた

図4. 内謁見所入側展開図(明治17年11月22日、木子文庫所収)

めに用いられたと考えられる。謁見所の天井は、その後の設計変更により、最終的には装飾天井に変更されたが、木子文庫に残された複数の天井伏図(図5・6)³⁴⁾からは、その過程において格天井の割付がさまざまに検討された様子を知ることができる。これは、伝統的な和風意匠である格天井を過去の日本建築には見られない大空間に適用するにあたって、伝統的なイメージを崩さずに大空間に調和しうる適切なスケールをさまざまに模索したものと見ることができる。

次に、壮麗化された主要建物の和風意匠について見るため、天井高拡大前後の謁見所と饗宴所の軸部の寸法について表2にまとめた³⁵⁾。表2から、天井高の拡大に伴って有壁、小壁、内法高がそれぞれ拡大されたことが知られ、中でも小壁の高さが大幅に拡大されたことがわかる。また、拡大後のそれぞれの寸法について謁見所と饗宴所とを比較すると、柱や長押などの部材寸法は同じであるが内法高は異なっており、拡大後の高さ方向の寸法が木割によって決められたのではない様子も窺える。謁見所と饗宴所では、拡大後の内法高さがいずれも小壁の高さよりも約0.75尺高く設定されたことから、ここでは小壁の高さよりも内法高を若干高くすることで、軸組全体の伝統的なプロポーションが維持されるように配慮されたと考えられる。

一方、軒高の変化について見ると、天井高が大幅に拡大されたにも関わらず、軒高の拡大幅はいずれも1尺に留められたことがわかる。これは、外観立面において軒高が高くなりすぎ、「タチ」の高い立面になることを嫌ったためと考えられ、このように外観立面においても室内の軸組意匠と同様に、伝統的な和風意匠のプロポーションを維持しようとする姿勢を見ることができる。

室内意匠の洋風化と和風意匠との関係については、入側空間の意匠に着目し、室内の洋風意匠と外観の和風意匠がどのように関係づけられたかについて検討した。まず、表2に用いた謁見所の矩計図(図7)を見ると、入側空間では天井高の拡大前・拡大後ともに小壁いっぱいには欄間が設けられており、入側の壁面意匠は、いずれもほとんど全てが軸組と建具のみによって構成されていたと考えられる。入側建具は当初、引違い建具で計画されていたものが設計変更によって内開き扉

図5. 謁見所天井伏図(左: 明治19年1月10日、木子文庫所収)

図6. 謁見所天井伏図(右: 日付なし、木子文庫所収)

表2. 謁見所・饗宴所の天井高拡大前後に見られる高さ方向の寸法変化

	謁見所			饗宴所		
	拡大前 明17.9/9	拡大後 明18.3/12	増加分	拡大前 明17.9/17	拡大後 明18.3/21	増加分
天井高 (廻縁下)	16.6尺	20.37尺	+3.77尺	17.82尺	20.56尺	+2.74尺
a: 内法高*	7.88尺	8.5尺	+0.62尺	8.0尺	8.7尺	+0.7尺
b: 小壁高さ	4.4尺	7.75尺	+3.35尺	5.0尺	7.94尺	+2.94尺
c: 有壁高さ	0尺	1.5尺	+1.5尺	0尺	1.3尺	+1.3尺
b-a	+3.48尺	+0.75尺	-	+3.0尺	+0.76尺	-
入側柱太さ	0.85尺角	1.0尺角	-	0.9尺角	1.0尺角	-
内法長押見付	0.72尺	0.8尺	-	0.72尺	0.8尺	-
軒高	21.0尺	22.0尺	+1.0尺	22.0尺	23.0尺	+1.0尺

* 内法高は、敷居上端から無目下端までの寸法

へと変更されたことが知られるが、変更前後の柱間の展開図³⁶⁾を比較すると、変更後の柱間にはそれ以前にはなかった内開き扉の釣り元を支える方立が設けられ、方立がまた欄間の同位置にも設けられたために、柱間がこの方立によって中央部と両脇に3分割され、伝統的な和風意匠には見られない柱間意匠になったことがわかる(図8)。こうした柱間の意匠は入側空間の反対面にも適用され、また扉と欄間に1枚ガラスが用いられたことから、入側空間は真壁でありながら極めて和風色の少ない意匠にまとめられたと見られる。一方、外観立面(図9)について見ると、外周部の欄間に設けられた方立はそのまま

図7. 謁見所矩計図(左: 明治17年9月9日、右: 明治18年3月12日、同縮尺、いずれも木子文庫所収・部分)

図8. 「謁見所入側戸口内面」(明治19年6月26日、木子文庫所収・部分)

立面に現れており、そのため欄間は3分割され、伝統的な日本建築はあまり見られない意匠になったことがわかる。この欄間には「海鼠」³⁷⁾形の線形が付ついた「挟マ欄間」が嵌められたが、こうした割付の欄間意匠は、近代的な室内意匠との調和に配慮して考案された、新しい和風意匠として見ることができる。

こうした室内の洋風意匠と外観の和風意匠との関係は、入側を持たない小規模な建物についても見ることができる。特に儀礼空間の外周部を構成する御車寄、東車寄、東西脱帽所や回廊といった建物については、主要建物と同様に明治20年頃に室内意匠が洋風化されたと考えられ、それは具体的には床仕上げが「拭板敷き」から「寄木張」に変更された点³⁸⁾や、いわゆる巾木(「靴摺」)のデザインが、より成の高い線形のついた洋風意匠に変更された点³⁹⁾などに見ることができる。中でも外周部に面す

る中窓の意匠形式の変更は注目すべきものと考えられ、変更前には「木格子窓」で計画されていたもの⁴⁰⁾が、明治19年12月の設計変更によってほぼ全て「上ケ落シ蔀戸」に変更された⁴¹⁾。この「上ケ落シ蔀戸」は、蔀戸風にデザインされた開口部の雨戸を分銅付きの紐で上下するように仕立てたもの⁴²⁾で、開けた時には全面開口になり、閉めた時には外観が蔀戸と同様の意匠になるものである(図10)が、室内側から見ると、格子がないために室内の洋風意匠と調和した横長窓のデザインになっていることがわかる(図11)。すなわち、この「上ケ落シ蔀戸」もまた、室内の洋風意匠と外観の和風意匠とを同時に満足させることを意図して考案されたものと考えられる。

以上のように、建設過程で加えられた「天井高の拡大」や「室内意匠の洋風化」といった設計変更の際に、室内の軸組意匠や外観立面では伝統的なプロポーションを維持することが重視され、また外周建具には室内の洋風意匠にも配慮した形式のものが考案された。いずれも伝統的な日本建築の和風意匠をそのまま用いたものではなく、近代的な内部空間を前提に考案されたもので、近代に特有の和風意匠と見ることができる。吹上宮殿において提案された「御所風」の意匠は、内謁見所の天井に限って適用され、儀礼空間の室内意匠には適用されなかったが、儀礼空間においては「上ケ落シ蔀戸」や「建蔀戸」⁴³⁾などの外周建具に「御所風」をアレンジしたデザインが適用された。

5. 建設過程の設計変更における設計技術者の関与の仕方

第二章から第四章にかけて、明治12年以降の造営過程で計画された木造和風の表向き建物の系譜を見てきたが、そこでは和風意匠の建物が伝統的な「宮中儀式」との関係の下に計画され、その意匠には「御所風」の和風意匠が繰り返し提案されるなど、設計内容においても連続性を認めることができるものであった。こうした木造和風宮殿は、主に宮内省の技術者によって設計されたことが知られており、中でも実施過程については、中村一正、立川知方、樋口正峻、木子清敬といった主任技術者が、それぞれの担当区分に限定されずに工事全般に関わっていたであろうと推察されている⁴⁴⁾。本章では、中村、立川、樋口、木子といった4人の上位技術者⁴⁵⁾が、前章で見た設計変更にどのように関与し、あるいは関与しなかったかについて、『皇居造営録』所収の文書に記された署名や検印跡(部・課の代表者の検印)の有無から判断し、これら設計技術者が明治宮殿の和風意匠の創出においてどのような役割を果たしたと考えられるかについて論じた。

表3は、表宮殿の主要建物⁴⁶⁾に関する伺書(計812件)に記された署名と検印跡の有無について、皇居御造営事務局が四課制(建築課などに改組された明治17年4月12日、四部制(工業部、調査部などに改組された明治19年1月16日、そして事務局が廃止され御造

図9. 謁見所南立面図(宮内庁所蔵『皇居御造営誌』より)

図10. 西脱帽所南立面図(図9に同じ)

図11. 西脱帽所内観写真(『皇居の面影』、1963)

営残業掛に事務が引き継がれた明治20年12月24日を区切りとして集計したものである。設計監理の担当部署は、四課制においては「建築課」、四部制においては「工業部」の担当であったことが『皇居御造営誌』に記されている⁴⁷⁾。

まず、木子清敬について見ると、四課制の時期には検印跡が3件しか見られず、表宮殿の設計にはほとんど関与していなかったと考えられる。木子清敬は、同時期の奥宮殿（聖上常御殿・皇后宮常御殿）に関する伺書において106件中102件に署名が見られることから⁴⁸⁾、この時期には既に着工していた奥宮殿の設計監理に専念していたと考えられる。一方、四部制に移行して以降は、残業掛の期間も含めてほぼ一貫して表宮殿の設計監理に関与していたことがわかる。このことから、木子は表宮殿の設計変更において、天井高の拡大やそれに伴う和風意匠の調整にはほとんど関与しておらず、一方、明治20年前後から竣工までに行われた室内意匠の洋風化・装飾化については、実質的に中心的な役割を果たした可能性が高いと考えられる。

樋口正峻については、四課制の時期には139件中133件に検印跡が見られることから、表宮殿の設計にほぼ一貫して関与していたと考えられ、特に明治18年においては、木工事着手直前の様子を示した平面図「第貳区各所柱敷座色分図」の作成された8月2日以前の伺書42件が全て樋口の署名で作成されている。天井高の拡大は明治18年1月頃に行われ、それに伴う和風木部の設計変更は先述の「第貳区各所柱敷座色分図」の作成された明治18年8月2日はほぼ終了していたと見られることから、この時期の設計変更とそれに伴う和風意匠の調整には、樋口正峻が中心的な役割を果たしたと考えられる。四部制への移行後については、樋口は「調査部」に所属していたため設計監理に直接的に関与する立場にはなく、「調査部」としての立場から竣工まで関与したと考えられる。

中村一正については、四課制の時期には明治17年のほぼ全ての書類に署名が見られるが、同時期には聖上常御殿・皇后宮常御殿の伺書20件にも検印跡が記されており、4人の中ではただ一人、表宮殿・奥宮殿の両方に関与していたと考えられる。明治18年には検印跡も全体の半分以上に減り、特に明治18年8月以降は52件中49件に検印跡が記されていないなど、樋口正峻と比べ、設計管理への実質的な関与は少なかったと考えられる。中村は、四課制においては「第二区」を担当し、四部制においても「工業部」に属するなど、公的な立場としては一貫して表宮殿の担当となっているが、年齢的にも役職的にも木子清敬や樋口正峻の先輩格に当たり、また開拓使の出身で洋風木造を得意としていたことなどを考え合わせると、表宮殿の設計監理においては、木子や樋口の上司として携わっていた可能性も考えられる。

立川知方については、四課制の時期では明治18年8月以降の35件の文書で検印跡が見られ、四部制の時期には43件に検印跡が見られるが、前者はすべて中村の不在時と重なっており、後者は3件を除いて樋口の不在時と重なっていることがわかる。このことから、立川は

中村や樋口の代理として検印を行った可能性が考えられ、いずれにしても設計変更において主要な役割を果たしたとは考えにくい。

以上のように、公文書に記された署名や検印跡を見る限り、樋口正峻は天井高の拡大とそれに伴う和風意匠の調整・変更に主要な役割を果たし、また木子清敬は、室内意匠の装飾化・洋風化において主要な役割を果たした可能性が高いと考えられる。このことから、これまで不明な点が多かった樋口正峻については、表宮殿の和風大空間を創出するにあたって極めて重要な働きをした人物として位置づけられ、また木子清敬については、従来の指摘⁴⁹⁾以上に和洋折衷の室内意匠の創出に大きく寄与していたと見ることができる。木子清敬と樋口正峻は、ともに維新前には禁裏に出仕していたことが知られている⁵⁰⁾が、明治宮殿に見られる近代的な和風意匠が、このような御所の伝統に通じた設計技術者によって行われていたことも、また注目に値する。

6. 結論

本稿では、宮内庁や木子文庫所収の史料を用いて皇居の造営過程で計画された木造和風の表向き建物の設計内容を検討し、宮殿が和風で計画された意図やその意匠上の特徴について、以下のことを論じた。

造営過程の初期では、明治14年に宮殿が木造和風で計画された。その際に作成された計画案からは、宮殿を「朝儀」を行う場として位置づける一方で、「国賓接待」のための部屋を設けないなど、宮殿の用途を「宮中儀式」に特化しようとする姿勢が見られた。計画案では、謁見所に京都御所の紫宸殿と極めてよく似たものが計画されたが、これはほぼ同時期に計画中であった京都御所の保存とそこの「即位の礼」の開催を考慮し、皇居において古式の「即位の礼」を行う事態を想定して計画されたものであったと考えられる。また、この時期の計画を巡る混乱の要因には、復古的な宮中儀式を重視する宮中関係者と洋風の国賓接待を重視する新政府との対立もあったと考えられる。

明治15年の山里正殿・吹上宮殿計画では、吹上に「左右相称の御車寄」と「大面積の内謁見所」が計画された。これは宮殿に不可欠な内謁見所が山里正殿に計画されていないことを考慮し、伝統的な「朝儀」に用いることも想定して吹上宮殿に計画したものと考えられる。この内謁見所は、「二重折上小格天井」や「化粧根裏天井」、「節戸」など、京都御所の「小御所」風の和風意匠で計画されたが、ほぼ同時期、同規模、同じ木子清敬の設計で建設された赤坂仮皇居・会食所にこうした意匠が見られないことから、これらの意匠は、宮殿としての「格式」を表現するために適用されたと考えられる。

実施過程では、「小御所」風の天井意匠が内謁見所に適用された。また、「天井高の拡大」や「室内意匠の洋風化」などの設計変更が加えられた儀礼空間では、伝統的なプロポーションを重視して軸組や外観立面が決定され、洋風意匠との調和を考慮して外観の欄間や建具がデザインされた。これらは、近代的な空間特性に配慮して考案された「近代的な和風意匠」として見ることができる。

表3. 『皇居御造営誌』所収の「伺書」（表宮殿関係*）に見られる皇居御造営事務局上級技術者の署名と検印跡の有無

		四課制				四部制			残業掛	
		明17.4/12～明17.12（計44件）		明18.1～明19.1/15（計95件）		明19.1/16～明20.12/24（計520件）		明20.12/24～明21.10/31（計153件）		
検印跡の有無		有（うち署名）	無	有（うち署名）	無	有（うち署名）	無	有（うち署名）	無	
木子清敬	第一区	2（0）	42	1（1）	94	工業部	494（413）	26	134（122）	19
中村一正	第二区	42（42）	2	42（0）	53	工業部	375（103）	145	27（12）	126
樋口正峻	第二区	40（2）	4	93（67）	2	調査部	479（0）	41	20（0）	133
立川知方	第三区	1（0）	43	35（27）	60	調査部	43（0）	477	0（0）	153

* 分析には、謁見所、饗宴所、後席之間、東西溜之間、御車寄、内謁見所、御学問所に関する伺書のうち、工事着落報告の書類を除いた合計812件を用いた。

公文書を見る限り、こうした設計変更においては、樋口正峻が天井高の拡大やそれに伴う和風意匠の調整を、木子清敬が室内意匠の洋風化を考慮した和風意匠の考案に主要な役割を果たしたと考えられる。

以上のように、皇居の造営過程は木造和風宮殿の計画が現実的な条件に対応しつつ具体化されて行く過程として捉え直すことができ、そこでは、宮中儀式の伝統や「格式」を示すために京都御所がモデルにされ、また竣工建物の儀礼空間には、大空間・洋風意匠といった近代的な空間特性に配慮した新しい和風意匠が考案されたと見られる。

註

- 1) 従来、学術論文や一般誌において明治宮殿の造営過程を取り上げる場合は、ほぼすべてこの小野木氏の論考が参照されており、例えば村松貞次郎・近江栄編『近代和風建築』（鹿島出版会、昭和63年、p.114）、初田亨「東京皇室建築の系譜」（『東京人』平成12年12月、pp.46-51）、大川三雄「和風大邸宅に見る近代の諸相」（『月刊文化財』平成13年10月、pp.8-15）が挙げられる。
- 2) 天覧図は、初期案に「工部省分担ノ境界及建築ノ図面符合スルヤ否ヤ両省協議ヲ遂ケ更ニ製図調整」したものとある。（『皇居御造営誌・巻之三』明治14年1月11日条）
- 3) 『下調図』（縮尺1:800）にスケールをあてて計ったおおよその値では、「会食所」は8間×10間程度、「奏任控所」は8間×14間程度と考えられる。
- 4) 『皇居造営誌・饗宴所』所収「會食所及溜ノ間人員調方ノ儀宮内書記官往復」（明治13年12月25日、明治14年1月17日）、人数は式部寮の算出による。
- 5) 『明治天皇紀』明治14年1月1日条および明治14年11月3日条
- 6) ここで「国賓接待」とは、晩餐会だけでなく天皇との対面をも含む広義の概念として用いている。
- 7) 赤坂仮皇居謁見所・会食堂と山里正殿の室名については、小野木重勝『明治洋風宮廷建築』を参照した。なお、『下調図』には赤坂謁見所・会食堂移築計画より前に計画された木造の本丸案（明治12年4月1日）と西之丸案（明治12年6月26日）の平面図が収録されているが、いずれも「会食堂」の隣室に「転球室」を計画しており、国賓接待も想定していたと考えられる。
- 8) 『皇居御造営誌・巻之三』明治13年10月19日条
- 9) 宮内庁書陵部所蔵、全7巻（明治2年2月～明治21年1月）
- 10) 『皇居御造営誌・巻之四』所収「皇居御造営ニ付地理建物位置等二係ル意見ヲ上申ス」（明治14年11月24日）
- 11) 岩倉具視は明治11年に、皇位継承に関する制度を調査する「儀制調査局」の設置を奏請している。（『岩倉公実記』（下、明治39年）所収「具視儀制調査局設置ノ議ヲ内閣ニ提出スル事」明治11年3月、pp.1575-1579）
- 12) 『明治天皇紀』明治11年10月16日条
- 13) 『岩倉公実記』所収「具視京都皇宮保存ニ関シ意見書ヲ上ツル事」（明治16年1月、pp.2038-2045）
- 14) 『保古飛呂比 佐佐木高行日記』（東京大学出版会、1976）所収、柳原前光書簡（明治13年1月21日付、p.21）
- 15) 「吉井ハ工部少輔ニシテ已ニ皇居建築主任トナリタル故ニ時々面謁下問ノ事モアルヘシ」（『古稀之記』『元田永孚文書』第1巻所収、p.198）とある。
- 16) 第一次の条約改正予議会は、明治15年1月25日から同年7月27日までで、合計21回開かれた。
- 17) 宮内庁所蔵『長崎省吾手記寫』（大正12年2月1日）に、「明治十三年外務省ヨリ宮内省ニ轉任シタル當時恰モ條約改正ノ初步ニ際シ時ノ外務卿井上閣下ノ意見ニ依リ帝室ニ於カセラレモ外交官接待ノ途ヲ開カセラルシ度トノ事ヨリ觀桜觀菊ノ兩園遊會ヲ初メトシ三大節宴會ニ外交官ヲ列セシムルノ端緒ヲ開キ又ハ外交官団体ノ新年賀賀ヲ受ケサセラル、事ニ付専ラ其ノ取調ノ事務ヲ擔當シタリ」とある。長崎省吾は、明治7年頃に英国公使館に勤務して皇室制度や国際儀礼を調査し、明治13年の帰国後に宮内省に勤務している。
- 18) 『保古飛呂比 佐佐木高行日記』（先掲）、明治14年1月1日、明治14年2月7日（柳原前光書簡）など
- 19) 『世外井上公伝』第3巻（原書房、昭和43年、pp.104-105）
- 20) 平面計画の分析には、第29号～第33号、第46号、第48号、第52号、第54号、第57号、第60号、第65号、第66号の平面図13点を用いた。
- 21) 『皇居御造営誌・巻之五』（明治16年1月13日条）には、「監事」の職掌について「工事経営ノ始終其他諸般ノ事ヲ調査スル事」と記されており、皇居御造営事務局は実施を想定した体制へと変更されたと考えられる。
- 22) 「御三間」は京都御所において聖上常御殿に隣接して設けられ、幕末には内謁見に使用されていたことが、藤岡通夫『京都御所【新訂】』（中央公論美術出版）に記されている（p.14）。
- 23) 『明治天皇紀』明治14年10月10日条
- 24) 吹上宮殿の内謁見所（99帖）の考察には、宮内庁所蔵「最終案」の他に、木子文庫所収の平面図（木100-1-002、日付なし）、立面図（木086-1-007、日付なし）、矩計図（木081-2-008、日付なし）、屋根伏図（木108-3-024、日付なし）、小屋組図（木100-2-009、日付なし）、「吹上木製御建坪等訳書」（木108-3-009-4、明治15年12月29日）を用いた。いずれも図面の内容から99帖間の内謁見所と判断したが、平面図と屋根伏図は『下調図』との比較から10月案と判断でき、天井は「化粧屋根裏」と12月案と異なっている。よって、高さ方向についてもこの間に変更された可能性はありうる。
- 25) 赤坂仮皇居会食所の規模・意匠については、宮内庁所蔵『会食所新築工事

- 録』（内匠寮、明治14年）所収「御会食所新築大工仕様」記載の寸法を用いた。会食所の竣工時の意匠的特徴については、山崎鯛介・藤岡洋保「赤坂仮皇居会食所の竣工時の意匠と建設の意図」（『日本建築学会大会学術講演梗概集（北陸）』2002、pp.241-242）にて論じた。
- 26) 吹上宮殿の明治15年10月～12月までは、御車寄から内謁見所、御学問所、控室などに至る主要な廊下の天井も「化粧屋根裏」で計画されている。
 - 27) 木子清敬が赤坂仮皇居会食所の設計に関与していたことは、「木子家略歴」（木子清忠『ある工匠家の記録』昭和63年、p.38）により判明する。また木子清敬が吹上宮殿計画の内謁見所の設計に関与していたことは、木子文庫所収の平面図2枚（木100-1-002、木100-1-007）に「木子清敬」の印が見られることから判断した。
 - 28) 『明治天皇紀』明治14年1月5日条
 - 29) 『皇居御造営誌・巻之六』明治16年4月14日条
 - 30) 『皇居造営誌・御学問所』所収「内謁見所及廊下共百分一地ノ間図」（明治17年5月7日）
 - 31) 木子文庫所収、「内謁見所地繪図」（木100-2-002、明治17年8月11日）
 - 32) 木子文庫所収、「内謁見所御間外廻り南側之図」（木100-2-048、明治17年11月22日）
 - 33) 『皇居造営誌・謁見所』所収「第貳区各所柱敷色座分之図」（明治18年8月2日）
 - 34) 木子文庫所収、謁見所天井伏図（図5：木100-2-056、明治19年1月10日）、同前（図6：木100-2-058、日付なし）の他に、比較的实施案に近い天井伏図（木099-2-015-2、明治19年4月11日）が1案存在する。
 - 35) 表2に用いた矩計図はいずれも木子文庫所収で、謁見所には[木100-2-030・明治17年9月9日、木100-2-031・明治18年3月12日]、饗宴所には[木099-1-069・明治17年9月17日、木107-1-026・明治18年3月21日]を用いた。
 - 36) 謁見所の展開図（いずれも木子文庫所収）として、変更前には「謁見所入側内面」（木099-2-028、明治18年8月4日）、変更後には「謁見所入側戸口内面」（図8、木099-2-001-11、明治19年6月26日）が存在する。
 - 37) 『皇居造営誌・後席之間』所収「後席之間建具杢造塗開戸及ヲサ欄間共仕様書」（明治20年7月）に「海鼠」とある。欄間の繰り形は少なくとも設計過程で3案（州浜形など）検討されたことが、木子文庫所収「謁見所外側オサ・マ拾分番ノ図」（木092-4-027-11、明治19年9月18日）などからわかる。
 - 38) 『皇居造営誌・御車寄』所収「御車寄謁見所其外御間内模様同之件」（明治17年4月16日）の附図では、御車寄、東西脱帽所、回廊の床仕上げが「敷物」とされているのに対し、『皇居造営誌・御車寄』所収「表受附之間寄木張仕様書」（明治20年4月）および「表受附ノ間廊下及東西脱帽所廊下共寄木張仕様書」（明治20年4月）では床仕上げが「寄木張」に変更されている。
 - 39) 『皇居造営誌・御車寄』所収「御車寄及受附之間東西廊下築造仕様書」（明治17年10月）では、「幅六七寸靴摺板」と記されていたが、『皇居造営誌・御車寄』所収「御車寄東西之間及東西脱帽所規造靴摺板御模様替仕増受負申付伺」附図「廊下通靴摺正寸之図」（明治20年3月15日）では、成8寸で上下に線形の付いた断面に変更されている。
 - 40) 『皇居造営誌・御車寄』所収「御車寄謁見所其外御間内模様同之件」（明治17年4月16日）の附図には「木格子モカラスセウシ」と記入されている。
 - 41) 『皇居造営誌・御車寄』所収「御車寄及東西脱帽之間東車寄東溜り之間其他中窓部戸及腰長押下部羽目共模様替仕様書」（明治20年1月）および附図「御車寄東西脱帽之間東溜り之間大工方模様替図」（明治19年12月）より。
 - 42) 同上「東溜り之間東車寄受附左右中窓上ケ落シ部戸五分臺之図」より。
 - 43) 「築造仕法書」（明治18年6・7月）では、謁見所の外周建具み「建部戸」で計画され、饗宴所と後席の間は「舞良戸」で計画されていたが、『皇居造営誌・饗宴所』所収「饗宴所後席之間舞良戸等仕様替二付仕増受負申付伺」（明治20年6月10日）により、謁見所と同じ「建部戸」に変更された。
 - 44) 小野木重勝『明治洋風宮廷建築』（先掲、pp.30-31）参照。実施過程における木子清敬の関与の仕方については、藤岡洋保、斎藤雅子、稲葉信子「東京都立中央図書館木子文庫所蔵の明治宮殿設計図書に関する研究」（『日本建築学会計画系論文報告集』第431号、pp.137-146）に詳しい。なお、同論文で不明とされていた「正」の印（木子清敬の107件より多い113件）は、樋口正峻の印であったことが、今回『皇居造営誌』の伺書から確認できた。
 - 45) 中村一正（1835～1888頃）の経歴については、遠藤明久「森山武光と中村一正」（『日本建築学会論文報告集』第104号、昭和39年10月）と詳しく、樋口正峻（1839年～没年不詳）の経歴については、小野木重勝「豊川稲荷本殿と設計者」（『日本建築学会大会学術講演梗概集（関東）』、昭和63年10月、pp.785-786）に詳しい。立川知方（1825～1894）の経歴については、土崎紀子・沢良子編『建築人物群像』（住まいの図書出版局、1995）巻末資料編（p.78）を参照した。
 - 46) 分析に用いた表宮殿の建物は、謁見所、饗宴所、後席之間、東西溜り之間、御車寄、内謁見所、御学問所とした。また「伺書」のうち、工事で着落の報告書類である「工事着手上申」と「工事落成上申」は分析の対象外とした。
 - 47) 四課制における「建築課長」の職掌については『皇居御造営誌・巻之六』（明治17年5月26日条）を参照し、四部制における「工部部」の職掌については、『皇居御造営誌・巻之七』（明治19年1月16日条）を参照した。
 - 48) 聖上常御殿と皇后宮常御殿の「伺書」合計293点を用いた。
 - 49) 「表・奥宮殿とも骨格となる建築の木割や構造等の設計にあたっては木子がかんりの部分で責任を負っていたものと推定する」（稲葉信子『木子清敬と明治20年代の日本建築学に関する研究』、p.49）など。
 - 50) 稲葉信子「木子清敬と明治20年代の日本建築学に関する研究」（pp.23-24）および小野木重勝「豊川稲荷本殿と設計者」（p.786）参照。

（2004年2月10日原稿受理、2004年5月11日採用決定）